書　評　　臨床検査学教育 Vol.16, No.2 p.118 ～ 119, 2024.

正常画像と比べてわかる　病理アトラス　第３版
マクロとミクロの対応で捉える病態

著者（編集）：下　正宗（東葛病院 臨床検査科）
長嶋洋治（東京女子医科大学医学部 病理診断学分野）
判　型：　A5 判　383 頁　定価（5,000 円＋税）
出版社：　羊土社　2024 年 2 月発行

今日の病院病理部が臨床に提供すべきものは、組織学的手法や電子顕微鏡による超ミクロ像の観察から得られる形態的な情報だけではない。免疫染色による組織型分類や分子標的治療薬の適応有無の確認、パラフィン切片や細胞診検体を用いた遺伝子検索による分子病理的な情報が必要とされることが多い。しかし、いかに免疫染色の所見や遺伝子検索の結果が重要視されようと、異常を来した臓器の形態の把握は病理部門の役割として必要不可欠である。そして、組織だけ見れば良いのではなく、適切な診断に必要な箇所をマクロで見て選択し標本化することもまた重要である。また、臨床検査技師においては、病理医の適正な組織診断のために質の高い標本を作製する技術を身につけなくてはならない。そのためには各臓器の特色や構造、正常像と異常像、アーチファクトによって生じる像を理解して、標本の質を評価できる能力が必要である。

本書は各臓器の正常と異常、肉眼的（マクロ）所見と組織学的（ミクロ）所見を比べて学ぶことができるアトラス書である。臓器別の章に分かれており、まず正常組織の構造を確認した後、各疾患の病変マクロ及びミクロ像に進む構成となっている。マクロ・ミクロ像には観察するためのポイントや簡潔な説明が記載されている。豊富な画像と的確な解説により、臓器・組織への理解を深めることができる。

臨床検査を学ぶ養成校の学生には、質の高い病理標本を作製することはなかなか難しいとは思うが、そのために必要な最低限の知識と技術は資格取得前に学んでおくことが望ましい。しかし、組織像を読むことは苦手であると感じている学生もいるようで、毎年国家試験前になると「この像のどこが異常か分からない」「そもそも正常組織を知らない」と学生から質問が来る。正常組織には解剖組織学などの講義・実習で触れているはずだが、いざ過去の国家試験の問題を勉強しようとするとうまく結びついていない学生が多いようである。

本書はそんな学生が多くの画像に触れることのできるアトラスである。一から組織学を学ぶ際にも、国家試験対策の辞書として使用する際にも頼りになる書籍だと考える。何より、正常マクロ像が各章に記載されていることが有難い。病理解剖の書籍などを探しても、異常のあるマクロ像や切り出し像は載っているが、正常のマクロ像をまとめている書は意外に見つからない。特に、附属病院を持っていない養成校の学生は正常のマクロ像を見慣れていないと思われる。「食道の扁平上皮はマクロだと白っぽく見え、胃の腺上皮とは違って見える」ということすらピンときていない学生もいるので、書籍にて沢山の正常マクロ像に触れられるのは良い機会である。

また、本書は「医師国家試験や共用試験を意識して（第３版の序より）」作成されているが、臨床

検査技師の国家試験対策にも充分応え得る内容であり、よく出題されるポイントが記載されている。しかしながら、一点だけ、小腸の正常マクロ・ミクロ像がないことが残念である。確かに小腸に病変が生じることは少ないかもしれないが、パネート細胞に関する設問が臨床検査技師国家試験ではよく見かけるため、小腸の正常ミクロ像は学生から需要があると考える。

2019年よりがん遺伝子パネル検査の保険適用も始まり、以前にも増して患者の治療選択における病理検査の役割が重要となっている。正常及び異常のマクロ・ミクロ像を理解し、質の高い病理標本を作製していけるよう、臨床検査技師の知識と技術の充実が益々欠かせない。病理の入門書として、また免許取得後の学び直しの指南書として、臨床検査に係る全ての人に本書を広く活用して頂きたいと思う。

（佐藤　瑞穂：東京工科大学医療保健学部
臨床検査学科　satohmzh@stf.teu.ac.jp）